

ブルーノートの古謝美佐子

(2010年5月20日。名古屋ブルーノートにて)

み やま みち ひと
海 山 道 人

ラジオで北中正和がぼそぼそしゃべっている。その声だけを聞くと、この人が、ワールドミュージックについて、とてつもない量の知識ととても深い造詣の持ち主であり、この分野のあらゆる音楽に通じた第一人者であるということとは信じられないであろう。そのとつとつとした誠実な話しぶりは決して華やかではないが、その内容たるや驚嘆すべきものなのだ。

その彼が、「古謝美佐子が6年前にネーネーズを脱退して初めて出したソロアルバムから1曲」とか何とか言っただけを流した。聞いたこともない声、聞いたこともない歌。歌詞の意味はほとんど分からなかったが、聴き終わったとき、感動のあまり心が震えた。「天架きる橋」という歌だった。

「古謝美佐子」って誰だ。

「ネーネーズ」って何だ。

何も知らなかった。

この日から、僕は古謝美佐子とネーネーズを探す旅に出た。こんなにも長い旅になるとは、当初考えもしなかったが……。

二

最初に「天架きる橋」を聴いてからすでに9年が経過した。古謝美佐子が名古屋のブルーノートに来るといふ。しかしブルーノートはジャズの牙城である。そんなところに本当に沖繩ミュージックの歌手が来るのだろうか。ウソじゃないのか。

でも本当だった。

インターネットで名古屋ブルーノートのホームページにアクセスした。よい席を取るためには会員にならなければならぬ規則になっている。僕はすぐに入会手続きをとり、ステージに向かってやや左の2列目のテーブル席を予約した。ここが大変幸運な席だったということはおとで判明する。

開演時間が来た。

まだ暗闇の中、キーボードの佐原一哉に続いて古謝美佐子が登場し、さらにエイサーグループの「琉神」のメンバーがステージに上がる。演奏と同時にエイサーが開始された。その直後にスポットライトが古謝美佐子をとらえ、彼女が歌い

始める。始まったとたんに僕は驚嘆した。彼女の歌のうまさ
に驚いたのではない。その声の瑞々しさに驚いたのである。

僕のスピーカーで聴く彼女の声は、体の中にエネルギーを
溜め、それを一気に放出することによって発せられているよ
うに感じられた。しかし実際の彼女の声はそれとは全く違う。

まるで、ほとばしる溪流の水のように自由で
清らかで豊かでスピード感がある。スピーカ
ーから聞こえてくる声も確かに柔らかいがそ
れはゴムの柔らかさだ。実際の声は羽の柔ら
かさなのだ。

CDは真実を伝えていないのではないか……
……。そう思った。しかし、これが大変な間
違いであったことに、僕は後で気づかされる
ことになる(注1)。

古謝の歌と三線は佐原のキーボードと一体
になり、更にエイサーは曲と溶け合い、絶妙
のバランスで曲が進む。曲の合間に彼女が発する「ハッ・
ハッ・ハッ・ハッ……」という掛け声はなんだろう。初代
ネーネーズのCDを聴くと、よく同じ掛け声が聞こえてくる
が、この声は彼女が発していたのだろうか。心地よい響きが
する。

2曲目の安里屋ユンタは馴染みの曲だ。何十年も前から本

土でも親しまれてきたこの歌(本当は「新安里屋ユンタ」と
いう)は、多くの歌手によって歌われている。ネーネーズは
上原直彦の歌詞を使っていたが、今回の歌詞の半分は沖繩の
言葉で歌われていてどのようなものかよく分からない。分か
らないが、情感たつぷりに歌われるこの歌を聴いていると、

遠い昔に戻ったような気持ちになる。

2曲目が終わって古謝美佐子の冒頭
の挨拶があった。沖繩の言葉で喋るの
で、何を言っているのか理解できない。
佐原一哉が適当に訳すこともあって、
2人の会話は漫才の掛け合いのよう
でもおかしい。共演の「琉神」は静岡
で活躍しているエイサーのプロ集団だ
という。舞台の上でエイサーを起承転
結のある「かたち」として表現し、見
事な存在感を示している。



天架ける橋/ 古謝美佐子 DISK MILK/ DM002

三

3曲目にアイルランド民謡「ポメロイの山々」が歌われた。
ポメロイは、今の北アイルランドにあるそれほど大きくない
山である。それにしても、数あるアイルランド民謡の中から
(結構知られた歌ではあるが) この歌を見つけ出し、沖繩の

音楽としてしまった佐原一哉という人はどういう人なのだろう。

そのまなざしの鋭さ以外、ぼさぼさ髪の普通のおっさんのように見えるこの人は、絶対に只者ではない。何しろ、「天架さる橋」や「童神」の作曲者なのだ。遠くさかのぼってネーネーズの最初のアルバム『IKAWU』にも編曲者として彼の名前がある。以後も初代ネーネーズの音楽監督としてその音作りはずっと携ってきた。

彼は曲想豊かなメロディーメーカーであり、類まれな作曲の才能を有していると感ぜられる。ネーネーズの歌う全ての曲の前奏や間奏の旋律は誰の手になるものだろう。ヒット曲の主旋律の多くを作曲した知名定男の天才は疑うべくもないが、彼女たちは沖繩の歌として編曲された「何日君再来」や「ノーウーマン・ノークライ」など外国の歌も歌っている。僕は、これらネーネーズの曲の前奏や間奏や魅力的なバックグラウンドの音響を含め、主旋律以外の全ての部分は佐原一哉が作ったのではないかと考えている（違ったらごめん）。

ネーネーズのサウンドは、知名一人の力だけではなく、もう一人の天才・佐原一哉の存在があつて、初めてできたものである（注2）。

アイルランドと沖繩はいくつかの点で似ている、とよく言われる。音楽も共通点が多い。アイルランドの歌手の多くは

ノンビブラートで、時に裝飾音をつけて歌う。だから古謝美佐子のノンビブラートの声は、アイルランド民謡にむしる相応しいのだ。

「ポメロイの山々」は、恋人を遠くに送りだし、自らはこの大いなるポメロイの山々の中に残るといふ、状況的には哀しい歌だ。古謝美佐子の歌は、遠くに美しい山並みを眺望するような高揚感があり、残る女性の決意の潔さがひとときわ鮮やかに感じられる。

CDでは、バックにカルロス・ヌニェスのティン・ホイッスルが入っている。佐原は、ここではキーボードでバグパイプの音を出している。歌に良くあっている。

四

4曲目は「ナークニー〜かいされ」だ。「橋ナークニー」夢かいされ」という2つの歌がくっついてこうなっている。古謝は三線を手に、よどみなく流れるように歌っていく。感情の表出はほとんどないかのごとくである。

この歌はいろんな意味でよく分らない。だいたい「ナークニー」も「かいされ」もどういう意味なのである。沖繩語辞典にも載っていない言葉だ。

いろいろ調べて、どうやら「ナークニー」は琉球王朝時代から沖繩各地で歌い継がれている遊び歌で、8・8・8・6

の琉歌の形式に、恋や農作業や遊びなど、各集落でのさまざまな生活の場面を即興で読み込んで歌うものであるらしいということが分かった。メロディーはある程度決まっていて、歌う人がそれを自在に自分流に歌うもの様である。

「かいされ」も似たような感じで、特有のメロディーに自由に歌詞を乗せて思いを伝える歌であり、歌詞は無数に存在するらしい。早弾きの場合、歌詞の間に「ジントーヨー」という相槌をうつ囃子がいいることもあるという。「ジントーヨー」とは何だ。また分からない。

もつと分からないことがある。

古謝美佐子はプロの作詞家ではない。詞の内容を言っているのではない。彼女は仕事として詞を量産するような作詞家ではないということだ。ではどういうときに詞を作るのか。

これまでの詞をみると、特別な状況下で、自分の中に湧き上がってくる詩情をいかんともしがたく、形にして吐露した、という感じが多い。「天架きる橋」然り、「童神」然り、「天じやら」然り……。

「ナークニー〜かいされ」は例外だろうか。この歌だけは彼女の理性の支配下に作られたのだろうか。「ナークニー」も「かいされ」も人の情を深く読み込んで歌われる歌であることは分かった。古謝美佐子は、単にこの形式で歌ってみたかったから、それに合う歌詞を作って歌ったのだろうか。

どうも違うような気がする。彼女は、これまでのどの詞も全身全霊を傾けて作っている。この歌だけが例外であるとは思にくいのだが……。

古代歌謡の趣をもつこの詞は、彼女の心情の発露ではないのか。まるで額田王の再来のようなおらかな恋の歌は、彼女の心をそのまま表したのではないのか。

激しい恋心を形にした詞は、そのままでは炎上してしまうと考えた彼女が、意図的にそれを「ナークニー」と「かいされ」という制約のある歌の中に封じ込めたのではないか。

共犯者と一緒に……。

いずれにしろ、古謝は、自らの歌詞を「ナークニー」と「かいされ」という歌の形式の中に入れて歌うことよって、伝統歌謡の正統の継承者であることを証明して見せた。

佐原であれば、この詞に美しいメロディーをつけることはさほど難しいことではなかったであろう。そして、古謝はそのメロディーに乗って、天空高く優雅に舞うことも可能だったはずである。あえてそうしなかったところに、この歌のよさがあるのだ、と思う。それに、この「ナークニー〜かいされ」は、着ている音の着物がとてもオシヤレだ。

五

5曲目は「黒い雨」だ。

佐原一哉作詞・作曲になるこの曲は、反戦の歌なのだろうか。黒い雨は、投下された原子爆弾の炸裂した後に降ってくる泥やほこりや煤などを含んだ重油のような粘り気のある大粒の雨のことで、強い放射能を帯びており、この雨に打たれると急性の放射線障害を発症する。この歌が直接この黒い雨をさしているかどうかは歌詞だけではわからないが、それを思わせる内容ではある。

佐原は、黒い雨を反戦の象徴として用いたのであろう。古謝は、その意図を意識してかどうか、強い思い入れと、ものすごい情熱を持って歌い進んでいく。

6曲目は一転、静かな「アメイジング・グレイス」に移行する。この曲が始まると、古謝は舞台左後方へと退いた。なぜかと思つて見ていたら、右手から真っ白の大きな獅子が出てきて歌にあわせて踊り始めた。白い獅子はとてもきれいで動きもダイナミックだ。

この歌の作詞者はニュートン・ジョンだが、ここでは、古謝と佐原が共同で沖繩語に訳した歌詞が使われている。原詞が極めて個人的な信仰を歌っているのに対し、二人のつけた詞は、地球全体の平和を願う内容になっている。個々の人の願いを全人類の願いへ昇華しようという希望の歌だ。「黒い雨」と対をなしているということが、ここまで聴くと分かる。

古謝は、歌以外は脇役に徹し、やさしいまなざしで白獅子

を包み込むように見ている。決して獅子の上に出ることなく、ただやさしく見守る彼女が、最後に獅子のほほにそっと手を触れようとするとところで曲は終わる。

一場の夢だ。

六

古謝美佐子は、日常は沖繩の言葉を使うのであろうが、ちやんとした日本語がもちろん話せる。その彼女が沖繩の基地の話をする場面は静まりかえる。

父は嘉手納基地で米軍の仕事をしていて米軍の車にはねられ、亡くなった。彼女が3歳のとき。下に双子の男の子が2人。この3人の子を、やはり「米軍基地で働きながら」守り育てた母親は「働きに働いて」67歳で病を得てなくなった。

その母親を想い、彼女は言う。「複雑な思いです。基地があれば今の自分はいない。けれども自分の孫達には基地はないほうが良い」。丸くて愛嬌のある彼女の顔が、慈愛に満ちた観音様のようになったのを僕は見逃さなかった。彼女は自分の原点を聴衆に向かって語りかけたのだ。

そう、今の彼女の歌の原点はここにある。ネーネーズ時代の彼女を僕は知らない。しかし、当時とは違う彼女が目前にいることは確かだ。

「童神」が始まった。

神の啓示なくしては書けないと思わせるこの曲は、最初の孫ができるときに自身で書いた詞に佐原一哉が曲をつけたものだという。「天架きる橋」が天国に旅立つ人への思いを託して作られたのに対し、「童神」はこれから生まれてくる子へのあふれる情愛から作られた。逝く人に対する愛と生まれてくる子に対する愛。古謝と佐原の作る歌はその根本に愛がある。

多くの歌に登場する愛は、男と女の間の愛である。しかし、今の古謝が作る歌にはそれがない。きっとこれからもないだろう。彼女のテーマは家族愛であり、人類愛であり、普遍的な愛なのだ。

「童神」は生まれてくる自分の孫に対する非常に個人的な情愛を歌った歌であるにもかかわらず、普遍的な内容を持っている。それは、万人に共通する想いであるからである。人間だったら誰にでもある愛、それは最も大事にするべきものではないのか。彼女はそう言っているように思う。

多くの歌手によってカバーされているこの曲であるが、僕はやはり古謝美佐子のもが一番好きだ。意味など分からなくてもよい。ただその歌を聴くだけで十分なのだ。でも、例



廻る命/ 古謝美佐子 DISK MILK/ DM008

えば「夏ぬ節来りば、涼風ゆ送てい、冬ぬ節来りば、懐に抱ちよてい……」というところで、手に抱いた子供に風を送ったり、寒さから守るしぐさをしたりしながら歌う彼女をみていると、コンサートは良いなあ、と思ってしまう。

七

最後の曲になった。

アルバム『廻る命』の冒頭を飾る「天じゃら」をここに持ってきたのはなぜだろう。

人は必ず死ぬ定めにある。親しい人が亡くなればその喪失感はいかに知れない。

祖母をなくして悲しみに沈む佐原一哉に古謝美佐子が贈った詞に、佐原が曲をつけた。それがこの歌である。「天架きる橋」と同じテーマで

あるが、こちらは母が子を慰めるような趣がある。きっと彼は心に大いなる安らぎを得たであろう。

悲しみに沈む人に対する慰めに必要なのは、同情の言葉でもなく、励ましの言葉でもなく、深い共感をもって傍に寄り添う言葉である。この歌にはそれがある。彼女には、佐原が

必要としたものが何であるかがよく分かっていったのだろう。

「童神」のあとに、コンサートの最後を締めくくる歌としてこの曲を持ってきたのは、「廻る命」に思いをはせてほしいという、古謝美佐子の聴衆への想いからだろうと思う。

お星さま一つ

お星さま二つ

お星さま三つ

お星さま四つ

やわらかく瑞々しい声がホールの隅々まで響いていく。

八

熱狂的な拍手は鳴り止まず、古謝と佐原はステージに呼び戻される。アンコールに何がよいかと佐原がきくと、あちこちから声がかかる。

「黄金ん子」「涙そうそう」「十九の春」「?」「ウムカジ」

「黄金の花」「天架きる橋」などのリクエストが次々にあがる。

これに対し、佐原が「涙そうそうは、この人、歌詞を知らないよ」というと、古謝がすかさず「あんた歌ったら」などと返し、和気藹々にアンコールが始まった。

「黄金の花」の歌詞を躓いたりしてご愛嬌のところもあつたが、結果的に彼女は全てのリクエストをメドレーのような形で歌いつぎ、要望にこたえた。佐原は、最後の最後となる

曲に「日々是好日」を選び、心をこめた古謝の全力投球の歌唱をもってこの日のコンサートが終わった。

古謝美佐子が客席に向かい、右手をゆっくり大きく輪のようにはらして言う。

「こんなに沢山の方に来ていただいて……。嬉しいです……」

後ろを振り向いた。場内は満席で、だれもが笑顔で温かい拍手を送っていた。

僕の旅が終わりを告げた瞬間だった。

☆ ☆ ☆

注1 古謝美佐子の声

筆者は、コンサートが終わったあと、不思議な思いにとらわれた。コンサートの冒頭で、古謝が最初の声を発したときに、それが、今まで自分がスピーカーで聞いていた声とあまりに違っていたからである。当初は、CDにはこのような音でしか収録できないのかもしれないと思った。

筆者のオーディオ装置は、クオードのCDプレーヤーとアンプにスピーカーはディットン66という古いもので、これでフルトウエングラーのベートーベンやブラームス、それにクナツパーツツシユのワーグナーやブルックナーを聞いている。ウイーンフィルをバ

ツクに歌うビルギット・ニルソンのイゾルデも、これで立派に鳴っていた。

この装置で聴く初代ネーネーズのCDの音と、現在のネーネーズが「ライブハウス島唄」で歌っている音とを較べたとき（変な較べ方だが）、十数年の時間の経過と、歌手による違いがあるのは当然としても、それほど大きな違和感を感じなかった。だから、古謝美佐子の声もこのスピーカーからでているのが本当の声だと思っていたのである。

ただ、本当にこの声なのか、と言う疑問も振り払えないでいた。だから、ブルーノートで本物の声を聞き、それが自分の想像通りだったことに狂喜したのである。

家に帰ってからもう一度『廻る命』をかけてみた。コンサートを聞いた後だから、歌の各部分でどのように聞こえていたかは歴然としている。あまりに違う。

時すでに遅いのだが、これは再生装置に問題があるのではないかとようやく思い至った。そこで、またもや遍歴の旅に出ることになった。古謝美佐子のCDを片手に、優秀なオーディオ装置を持っていく友人の家や、ゆっくり聞ける環境のオーディオ・ショップを訪ね歩くことにしたのである。

名古屋ブルーノートはジャズ系の店だから、きっとスピーカーはJBだろう。それともアルテックか。あるいはそれらを組み合わせたものか。ただ、あれほど大きなホールになると、家庭用の音響

装置の常識は通用しないだろうから、何が使われているかではなく、どう響いたか、という自分の耳のほうに信用できる。しかし、JBしならきつと近い音を出してくれるだろうと思つたので、このメーカーの高級スピーカーを持っている友人宅を訪れた。

ジャズの、それも女性ボーカーが最もよく聞こえるようにという設計で作られたその装置から出る古謝美佐子の声は、確かにコンサートで聴いた音に近かったが、それでもなお、同じではないという思いが残った。その後も何軒かを訪ね歩き、いくつかのオーディオ装置を聴いたが、あのときの音だと思える音にはめぐり合わないかった。

そんなある日、名古屋市昭和区の山手通りにある「NEXT」というオーディオ店を訪ねた。店の人にCDを渡し、かけてもらった「ボメロイの山々」の冒頭の三線の響きを聴いたとたん、また古謝美佐子の声が出ていないのに、「これだ」という確信が走った。前奏に続いて彼女が歌い始める。ブルーノートで軽やかに三線を弾きながら歌っていた古謝美佐子の姿が、鮮やかに眼前に浮かび上がった。

このスピーカーは、バング・アンド・オルフセン社（B&O）のBeoLabgという名前の、同社ではNo.2に位置するものであるという。円錐形の素敵なデザインで、見ているだけで惚れ惚れする上、出てくる音は伸びやかで透明感があり、しかも重厚さにも欠けず、ライブ感にあふれている。

後日談になるが、筆者は自宅のスピーカーでどうしてもうまく聞

こえない歌手がもう一人いるのを思い出した。マリア・カラスである。ジヨルジュ・プレートルの指揮で歌ったカルメンが評判を呼んだとき、筆者も「他聞に漏れずレコードを買って聴いた。やや下品に響くその声はカルメンにぴったりだと思ったが、この人は実演でカルメンを歌ったことはないのだという。その後、蝶々夫人やトスカをこの声で聴いてウームとうなった。

ひよっとしたらカラスの声も………と思い、CDを持って再び「NEXT」に向かった。アルバム『CALLAS ETERNA L DIVA』の冒頭を飾る「ある晴れた日に」が始まり、オーディオルームには、美しく輝かしい声が広がった。フランコ・ゼツフィレツリがその著『ゼツフィレツリ自伝』の中で活写しているカラスの声は、本当はこういうものだったのであるうと思わせるに十分なものであった。

筆者はこのスピーカーを聴いて、ようやく古謝美佐子の声の謎を解明したと思った。まさか再生装置の違いによってこんなにも大きな違いが出るとは考えてもいなかった。筆者は、今、Beolab9というスピーカーをどうしても欲しいと思っている。

古謝美佐子の本当の声を聴くために………。

注2 ネーネーズのサウンド

筆者は、9年前に「天架きる橋」を聴いて以来、ずっと古謝美佐子を追いかけながら、同時にネーネーズをも追いかけていた。一昨

年(2008)7月にネーネーズのほうに先に到達し、「ライブハウス島唄」で初めてその演奏を聴いた。格調高かった初代ネーネーズのメンバーのいるはずもなかったが、4人の若いメンバーからなるネーネーズの歌う歌はかつてのメンバーの歌を彷彿とさせる。

沖繩に住んでいる友人が、「ネーネーズは良いけど、あれはすでに古典になっちゃってる。他にも良いグループは一杯いるよ」というけれど、沖繩に行ってネーネーズを聴かないなんて考えられない。まだ若く、日々成長を続ける彼女たちを聴くことは、筆者の数少ない楽しみの一つなのだ。

佐原一哉は、ネーネーズが歌う一連の作品の音楽監督として何十にも及ぶ音楽作品を提供してきた。無限に沸きあがってきたであろうメロディーを次から次へと投入し、さまざまな楽器を駆使して作ったバックの音楽は、作られてすでに20年を経過したものもあるのにまったく古さを感じさせない。その音楽は、現在の若いメンバーのバックで昔と変わらない響きで鳴っている。

彼女たちが、現在もなおこれらの歌を歌って客に感動を与えているのは、バックで歌を支えているサウンドが大きな役割りを果たしているからであるに違いない。友人が「古典」と言うのもむべなるかな。これらは、一時的に熱狂的に聞かれ、飽きられ、忘れられてしまふ音楽とは無縁のところにいるのだ。佐原一哉の仕事は、多くの人に幸せを与えている。かく言う筆者もその幸せを享受している一人である。